福岡市埋蔵文化財調査報告書 第606集

藤崎 13

1999

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との玄関口として発展し、市内には数多くの遺跡が残されています。私たちはこれらの遺跡を後世に伝えていくことを願い、さまざまな形で遺跡の保護に取り組んでおります。

その一方で、最近の都市の発展により新しい開発事業が数多く手がけられ、そのために重要な遺跡が破壊され、失われつつあるという厳しい現実があります。福岡市教育委員会ではこれらの遺跡についてはあらかじめ事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努めております。

本書は早良区藤崎遺跡群第30次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護の一助となるとともに、学術研究の資料として御活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで費用負担などご協力を頂いた福岡信用金庫をはじめとする関係者の方々に対し、心より謝意を表します。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　町田英俊

例　言

1.本書は福岡信用金庫藤崎支店の店舗立て替えに先だって、福岡市教育委員会が1998年1月6日から1月19日にかけて行なった藤崎遺跡群第30次の調査報告書である。
2.本書に掲載した遺構実測図の作成は大塚紀宜が行なった。
3.本書に掲載した遺物実測図の作成は大塚が行なった。
4.本書に掲載した遺構及び遺物写真の撮影は大塚が行なった。
5.本書に掲載した挿図の製図は大塚、田中克子が行なった。
6.本書で用いた方位は磁北で、真北から6°21'西偏する。
7.本書で使用した遺構の呼称は、甕棺墓をST、土坑をSK、溝をSDと略号化している。
8.遺構、遺物番号は基本的に通し番号にするが、遺構番号に一部欠番が生じる。
9.本書に関わる記録・遺物などの資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
10.本書の執筆・編集は大塚が行なった。

遺跡調査番号	９７６１		遺跡略号	ＦＵＡ－３０
調査地地番	早良区高取２丁目159番		分布地図番号	８１－０３０７
工事面積	199m²		調査対象面積	65.2m²
調査実施面積	65.2m²	調査期間	平成10年1月6日～平成10年1月17日	

本文目次

Ⅰ.はじめに

1.調査に至る経緯 …… 1

2.発掘調査の組織 …… 1

Ⅱ.遺跡の立地と環境 …… 2

Ⅲ.調査の記録 …… 5

1.調査概要 …… 5

2.遺構・遺物 …… 6

1)溝状遺構 …… 6

2)甕棺墓 …… 8

3)土坑 …… 11

4)その他の遺物 …… 12

Ⅳ.結語 …… 13

挿図目次

Fig.1　周辺遺跡分布図(1/50,000) …… 3

Fig.2　第30次調査地点位置図(1/2,000) …… 4

Fig.3　調査区現況図(1/200) …… 5

Fig.4　SD-001遺構実測図(1/40) …… 6

Fig.5　遺構配置図(1/80) …… 7

Fig.6　ST-002・004遺構・遺物実測図(1/20、1/10) …… 8

Fig.7　ST-005遺構・遺物実測図(1/20、1/6) …… 9

Fig.8　ST-007・010遺構・遺物実測図(1/20、1/10) …… 10

Fig.9　SK-006・009遺構実測図(1/40) …… 11

Fig.10　調査区内出土遺物実測図(1/4) …… 11

Fig.11　藤崎遺跡群出土甕棺墓分布図(1/1,000) …… 14

図版目次

図版1　(1)調査区西側全景(南から)

(2)調査区東側全景(東から)

図版2　(1)SD-001土器出土状況(南から)

(2)ST-002(南から)

図版3　(1)ST-004(東から)

(2)ST-005(東から)

図版4　(1)ST-007(西から)

(2)ST-010(北から)

図版5　(1)SD-001土層断面(東から)

(2)ST-004周辺土器出土状況

(3)ST-005(西から)

図版6　(1)ST-005下甕出土状況(東から)

(2)SK-008(西から)

(3)SK-006(北から)

図版7　出土甕棺

Ⅰ　はじめに

1.調査に至る経緯

1997年10月6日、福岡信用金庫（大西　篤理事長）より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に早良区高取2丁目159番における同金庫藤崎支店の店舗立て替えにともなう埋蔵文化財事前審査願が申請された。これをうけて埋蔵文化財課では関係者と協議をかさねた結果、申請地の隣接地で遺構が確認されており、当該地でも遺跡の存在は必至であること、同年12月末の店舗の解体後に緊急に調査が必要なこと等の条件から、翌1998年1月6日に現地で試掘調査を実施し、その結果旧店舗の基礎により破壊されている部分を除いた箇所で遺構を確認し、同日より記録保存のための発掘調査を開始した。発掘調査は1998年1月6日より開始し、1月17日に終了した。

発掘調査の実施に当たっては、福岡信用金庫はじめ関係者の方々には多大なご協力をいただいた。ここに記して感謝いたします。

2.発掘調査の組織

調査委託　福岡信用金庫　理事長　大西　篤

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　埋蔵文化財課　課長　荒牧輝勝（前任）　柳田純孝（現任）

調査第一係長　二宮忠司

庶務担当　埋蔵文化財課　内野保基（前任）

文化財整備課　木原淳二（現任）

事前審査　埋蔵文化財課　松村道博　屋山洋

調査担当　埋蔵文化財課調査第一係　大塚紀宜

調査作業　金子由利子　佐藤テル子　指山歌子　指山浩子　柴田常人　西尾タツヨ　堀川ヒロ子

松井フユ子　門司弘子　倉光政彦

整理作業　田中克子　樋口勝子　樋口三恵子　大上康子

II. 遺跡の立地と環境

藤崎遺跡は、福岡県福岡市早良区藤崎・高取・百道にかけて所在する弥生時代から中世・近世にかけての遺跡群の総称である。遺跡の範囲は東西400m、南北650mにおよび、範囲のほぼ全域が砂丘上に立地する。

藤崎遺跡自体が立地する砂丘は、室見川・金屑川河口に博多湾の回流によって形成された東西に長く伸びる砂州で、同一砂丘上に西新町遺跡も立地する。砂丘の標高は現況で5～6m、遺構面の遺存状況から当時は現況より1～2m低かったものと思われる。砂丘の南側は遺跡形成当時は西側で後背湿地が広がっていたとされ、東側では祖原山・皿山などの独立丘陵に接している。遺跡の南限線はこれらの自然境界にほぼ一致しており、当時の地形が遺跡の形成にも影響を与えたことが伺える。

藤崎遺跡の周辺では、室見川流域に弥生～中世の遺跡群が点在しており、藤崎遺跡もこれらと関連したものと考えられるが、室見川流域の各遺跡群中での藤崎遺跡の位置付けは未確定の部分も多い。また藤崎遺跡で検出された甕棺墓群に相当する規模の集落が同遺跡内で検出されておらず、墓葬群に対応する集落の求めかた次第で、当時の地域内の関係を解釈する結果が変わってくる。

藤崎遺跡では、1917年に中山平次郎氏が調査を行ったことを端緒とし、福岡市教育委員会が主体となった調査は1975年に開始されて以来、過去24年間に本次調査を含め延べ31回の調査次数を重ねてきた。各次の調査内容は各報告書を参照することとして、ここではこれまでの各次数の調査結果を時代ごとにまとめ、遺跡群の各時代における様相を述べたい。

縄文時代以前　藤崎遺跡群で、縄文時代以前に相当する遺構・遺物はこれまで検出されていない。砂丘の形成時期とも関係するが、この時期には藤崎地区は漁労の場としての活動は想定しうるが、定住や一時的な居住とは関係のない土地であったと考えられる。

弥生時代　藤崎遺跡で時期的に最も早い遺構は突帯文時期の土器棺墓である（第5次調査）。その後弥生時代前期前半から中葉の墳墓群として第1、第2、第5、第13次の各調査で、板付Ⅰ式から金海式の甕棺墓・土壙墓が検出されているが、中期と比べて量的には少ない。中期になると、甕棺墓群を中心に遺跡の範囲が拡大し、遺構の数も増大する。甕棺墓は城ノ越式から立岩式まで間隙なく継続して存在するが、特に汲田式（第1、7、10次調査）、立岩式（第1、7、8、10、11、13、22、25次調査）を2つのピークとする。弥生後期には甕棺墓は桜馬場式とされる甕棺が2基出土する（第7次調査）が、数的には激減する。

古墳時代以降　古墳時代には方形周溝墓が出現し、三角縁二神二車馬鏡（第3次調査）、小型仿製鏡（第4次調査）等が出土する。またこの時期から住居址が検出されるようになり（第1次調査）、近世まで集落として継続する。中世には現在の街道筋の方向に大溝が開削されている。近世に遺跡群の南方に高取焼の窯が開かれ、製品や窯道具などが出土するのも、この遺跡の特徴である。

Fig.1　周辺遺跡分布図(1/50,000)

1　藤崎遺跡　2　西新町遺跡　3　姪浜遺跡　4　有田遺跡群　5　野方中原遺跡　6　野方久保遺跡　7　野方塚原遺跡
8　羽根戸原C遺跡　9　吉武遺跡群　10　都地遺跡　11　四箇遺跡群　12　飯倉C遺跡　13　飯倉D遺跡　14　飯倉F遺跡

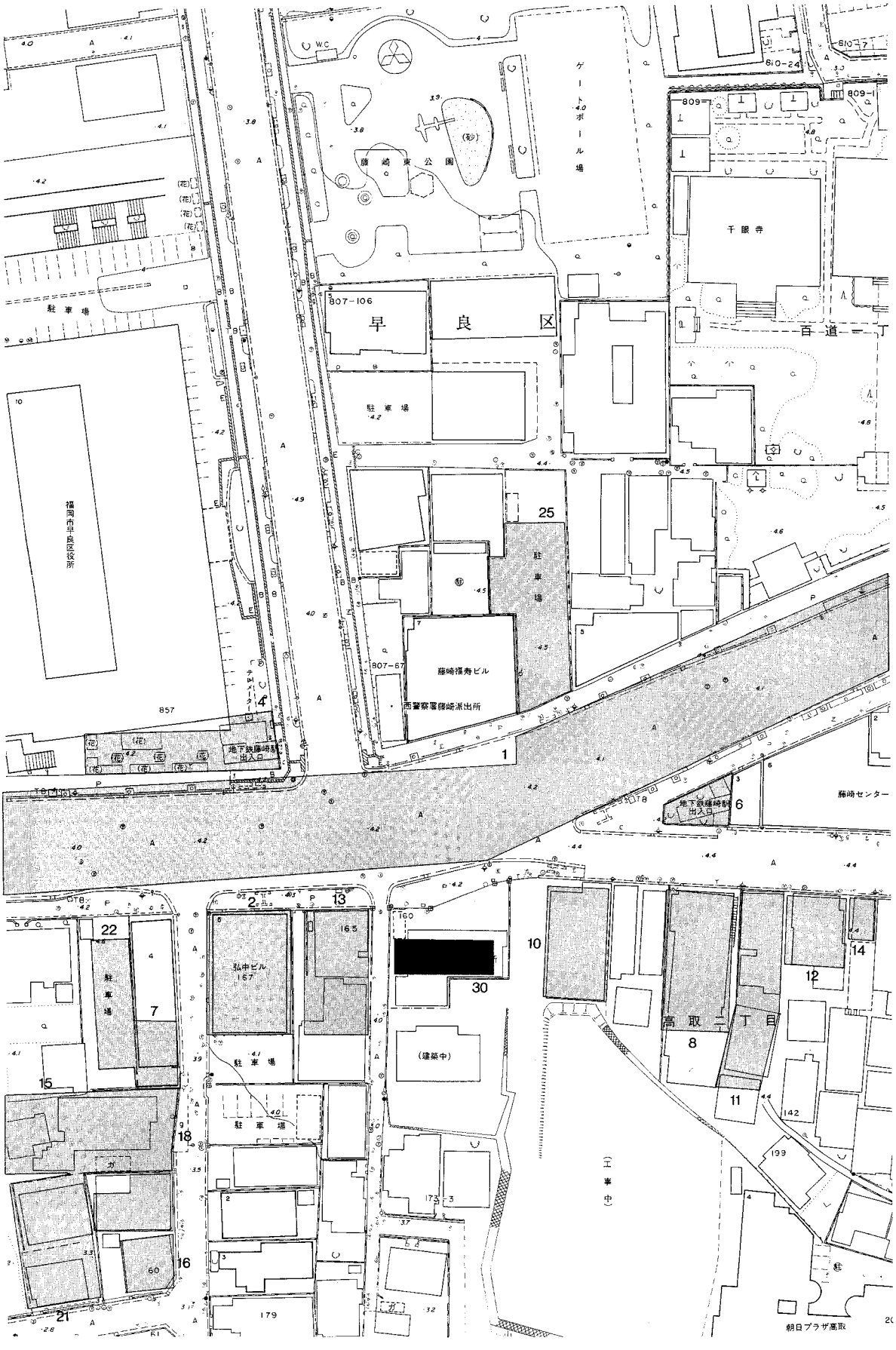


Fig.2　第30次調査地点位置図(1/2,000)

Ⅲ．調査の記録

1．調査概要

今回発掘調査を実施した第30次調査区は遺跡全体の南東側地区にあたる。調査区南東側には小山塊の基盤が迫り、砂丘の端部になる。敷地面積は378.6㎡で、うち遺構が良好に残る部分を調査対象とし、調査面積は65.2㎡である。

本次調査区の東側は第10次調査区に隣接し、西側は第13次調査区に隣接する。第10次調査区は弥生中期の甕棺6基、古墳時代の方形周溝墓1基を検出し、第13次調査区では弥生前期～中期の甕棺墓31基、箱式石棺墓1基、方形周溝墓1基、中世の溝等を検出している。撹乱埋土中に破壊された甕棺片が多くみられ、本来の甕棺基数はさらに増加する可能性がある。

現況の標高は4m前後で、1mほどの撹乱層の下で遺構面を検出する。遺構面の標高は3m前後で薄明黄色砂質土に達する。出土した遺構は、甕棺墓5基、溝状遺構1条、土壙1基である。甕棺墓5基の内訳は成人棺4基と小児棺1基で、うち2基は上部が既に後世の開発によって破壊されており、底部部分が残るだけで詳しいことは不明。残る3基も遺存状況は良好ではない。

溝状遺構は調査区西側中央を東西に走る。中世の遺物が出土しており、隣接する調査区で検出された溝に関連するものと考えられる。

なお、調査にあたっては廃土処理の都合で、調査区を東西2つに分割し反転して調査を行った。その際、西側の撹乱の状況を見て東側調査区の範囲をわずかにずらしているため、全体に東西の調査区が食い違っている。

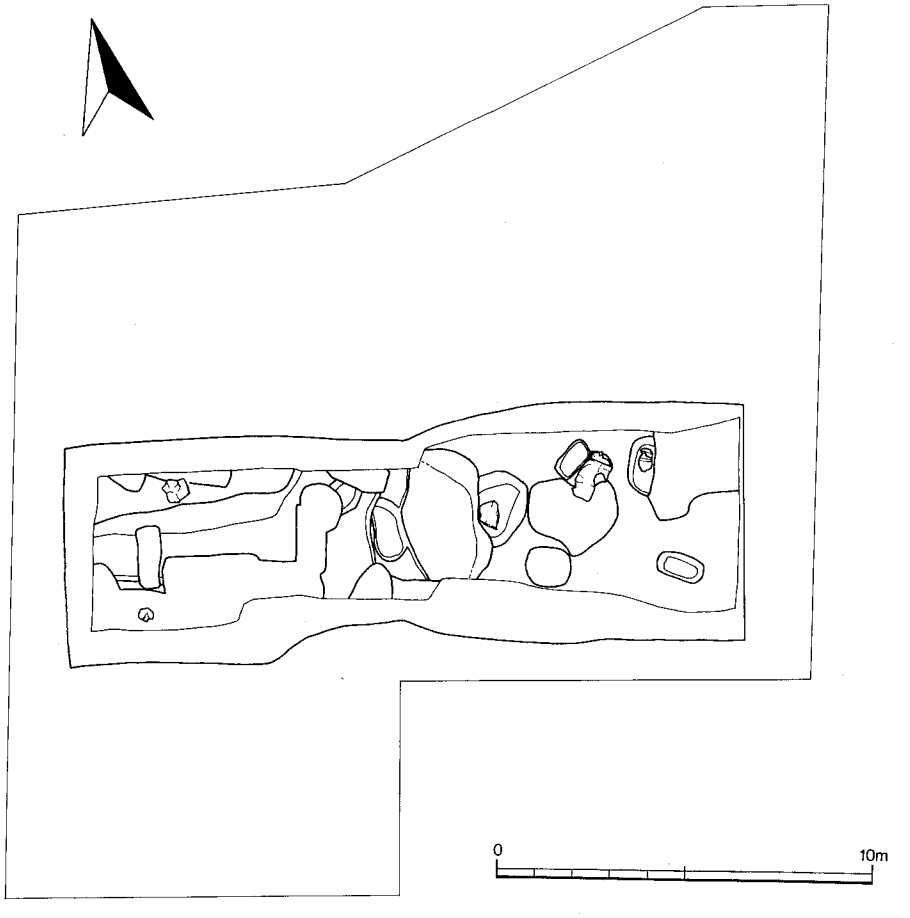


Fig.3　調査区現況図(1/200)

2. 遺構・遺物

1) 溝状遺構

SD-001 (Fig.4)

調査区西側中央を東西方向に走る溝で、北側の肩部は良好に遺存しているが、南側は撹乱によって大きく破壊されている。検出時で幅1.8mだが、削平前はさらに広かったと見られる。調査区内で12mの長さをはかる。溝は西側から直線的に東に延び、東側で北にカーブするような平面形になるが、東側は撹乱によって溝の大部分が切られており、複数の遺構の切りあいの可能性もある。溝の方向が屈曲することから当初は方形周溝墓の可能性を考えたが、遺構掘削の段階で遺構覆土から中世に属する陶磁器片が出土し、隣接地で検出された溝に連続するものと考えられる。遺構覆土は黒褐色砂質土で炭化物粒を若干含んでおり、地山の薄明黄色砂質土とは明瞭に区別される。また、土層断面では自然埋没の様相を示す。

掘削の結果、残存する深さは40cm、溝底部は平坦で、断面形態は溝の各部分でいずれもU字形を呈する。溝西側の直線部分の北側で甕棺破片と見られる土器片群を多数検出したが、これは甕棺墓ST-004に関係する可能性が高い。その他、中世に属する陶磁器片が覆土から散漫に出土する。

出土遺物 (Fig.10)

8は土師皿。口径9.8cm、器高1.0cm、底径7.4cm。底部は糸切り。このほかに陶磁器片などが出土するが、小片である。溝構築時に破壊されたと考えられる甕棺破片については後述する。

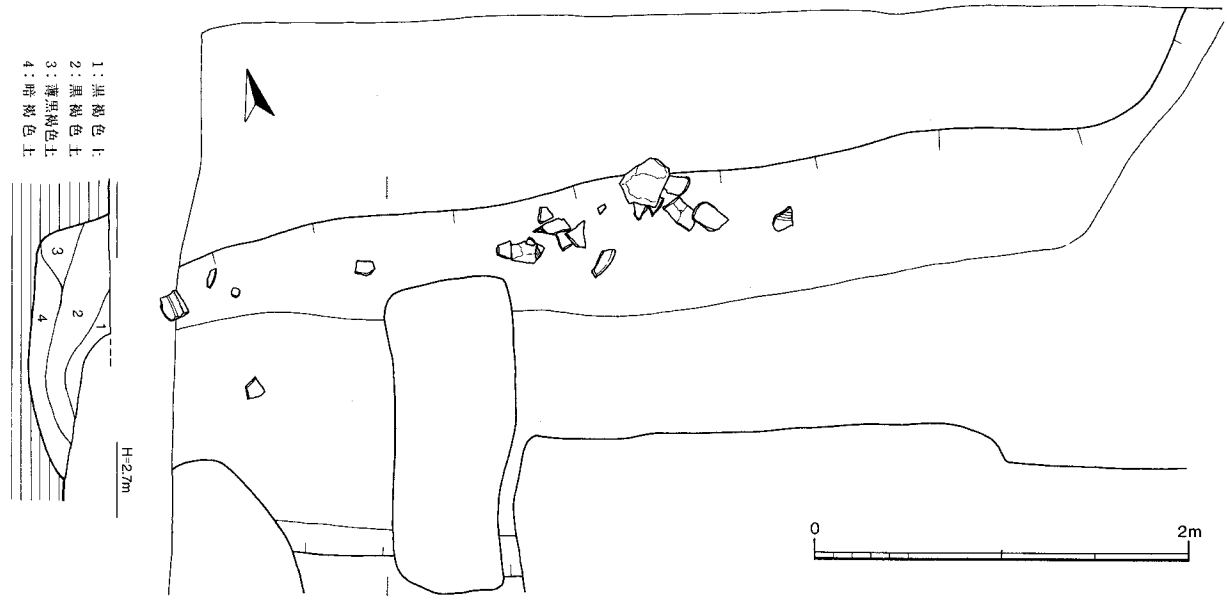


Fig.4 SD-001遺構実測図(1/40)

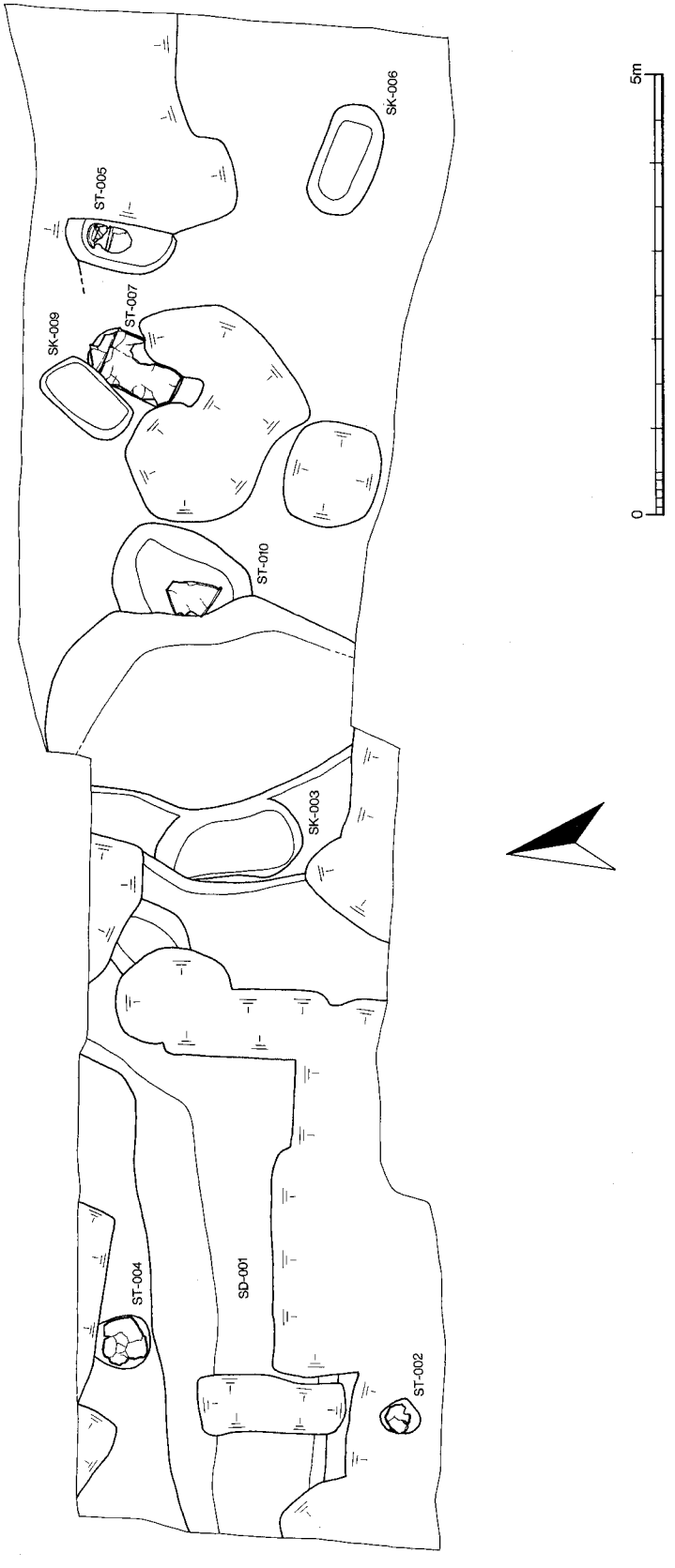


Fig.5　遺構配置図(1/80)

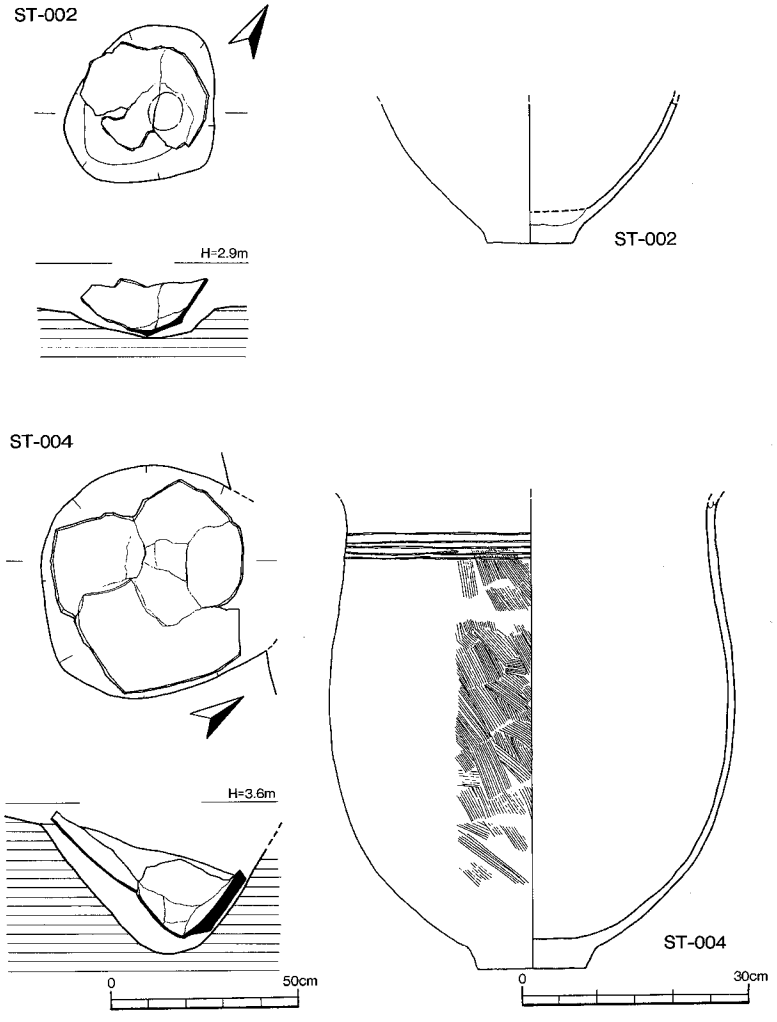


Fig.6　ST-002·004遺構·遺物実測図(1/20・1/10)

2）甕棺墓

ST-002（Fig.6）

調査区南西隅で検出された、成人棺を使用したとおもわれる甕棺墓である。調査区南側の撹乱埋め土をすべて除去した下から、底部のみが原位置で遺存する形で検出された。したがって甕棺墓上部は完全に失われているが、検出時の状況として主軸を南東－北西方向に向け、甕棺上部を南東方向に傾ける形であることが判断できる。検出時の標高は2.7mで、遺構掘り方は浅い円形で、底部のみ残存する。

甕棺破片は北側で比較的良好に遺存しており、底部部分はほぼ完全な状況を保持している。底部の傾きからみて、本来の埋置状況は正置埋葬に近い状況であったと考えられる。なお、覆土中にも甕棺上部の破片は含まれておらず、また他の甕棺個体の破片も検出されていないため、単棺・合口の別は明らかでない。

出土遺物（Fig.6）

出土した甕棺は、残存高19.4cm、底径11.4cm。底径を見る限り、成人棺の規模と考えられる。内外面はナデ調整で、底部内面は剥落する。上部を大きく欠損するため、全体の形態や大きさは不明。また正確な時期判断も困難だが、底部のプロポーションから見て、伯玄式から金海式のやや広い範囲で考えたい。いずれにせよ弥生前期の範疇におさまるものとみられる。

ST-004（Fig.6）

調査区北西側、SD-001北側で検出された甕棺墓で、成人棺を使用している。甕棺上部は削平の結果失われている。主軸はほぼ南北方向に向き、底部の傾きからかなり強い傾斜をもって埋置されていたことがうかがえる。遺存する破片は上方から押されるように大きく割れて落ち込んでいる。墓壙は検出時で長さ60cm、深さ35cmのすり鉢形で、強い傾斜をもった墓壙である。この強い傾斜は甕棺底部の傾きと符合する。覆土中に甕棺上部の破片は含まれておらず、また他の甕棺個体の破片も検出されていないため、単棺・合口のいずれかは不明。SD-001内やST-004周辺に散乱する甕棺破片は、ST-004と直接接合しないが、破壊された甕棺片が散乱、混入した可能性がある。

出土遺物（Fig.6）

出土した甕棺は、胴部付近で直接接合しないが図上で復元したものである。復元残存高63.0cm、底径7.2cm、胴最大径54.4cmを計る。外面は縦方向のハケ目後、横方向に5条の沈線を回す。沈線

の施文は上から見て右回り方向である。内面はナデ調整で、製作時の粘土紐輪積み痕が残る。胴下部で最大径になり、胴部上位でやや細くなるという、前期甕棺の形態を残す。口縁部を欠くため正確な型式は不明だが、伯玄式または金海式の古段階に属するものと見てよい。

ST-005 (Fig.7)

調査区北東側で検出された小児棺墓でほぼ完全な形で遺存する。墓壙は楕円形で全長127cm。墓壙東側と北側を撹乱で壊される。墓壙床面はほぼ平坦で、甕棺が埋置される部分のみ周囲から一段下がる。検出状況から、甕棺は墓壙のやや北に寄った状態で埋葬されたと考えられる。下甕は瓢形の壺型土器を使用し、水平に埋置する。上甕は下甕とは合口ではなく、半裁した甕形土器を倒置して、下甕の口縁を覆うように蓋をしている。墓構内には上甕は半個体分しか遺存せず、埋葬時にすでに半裁した甕形土器を使用したものとみられる。

出土遺物 (Fig.7)

上甕は甕形土器を斜め方向に略半裁したもので、底部を欠く。残存状況は口縁部付近で1/2強。口径29.0cm、胴部最大径29.3cm。胎土は砂粒をほとんど含まない細かい粘土で、色調は赤褐色を呈する。外面底部付近は縦方向ヘラミガキ、胴部以上は横方向のヘラミガキで、口縁部、突帯部分はヨコナデ。外面全体と内面上位に丹塗を施し、内面では幅3.5cmの帯状のはみ出し部分が残る。この幅が丹塗の際の工具幅と考えられる。

下甕は瓢形土器で、完形。口径25.8cm、器高42.8cm、底径9.6cm、胴部最大径29.0cm。胎土は砂粒をほとんど含まない細かい粘土で、色調は明赤褐色を呈する。外面は胴部が縦方向ハケ目、頸部ナデ。内面はナデ調整。口縁部、突帯部分はヨコナデを施す。外面上半分から内面頸部部分にかけて丹塗を施す。

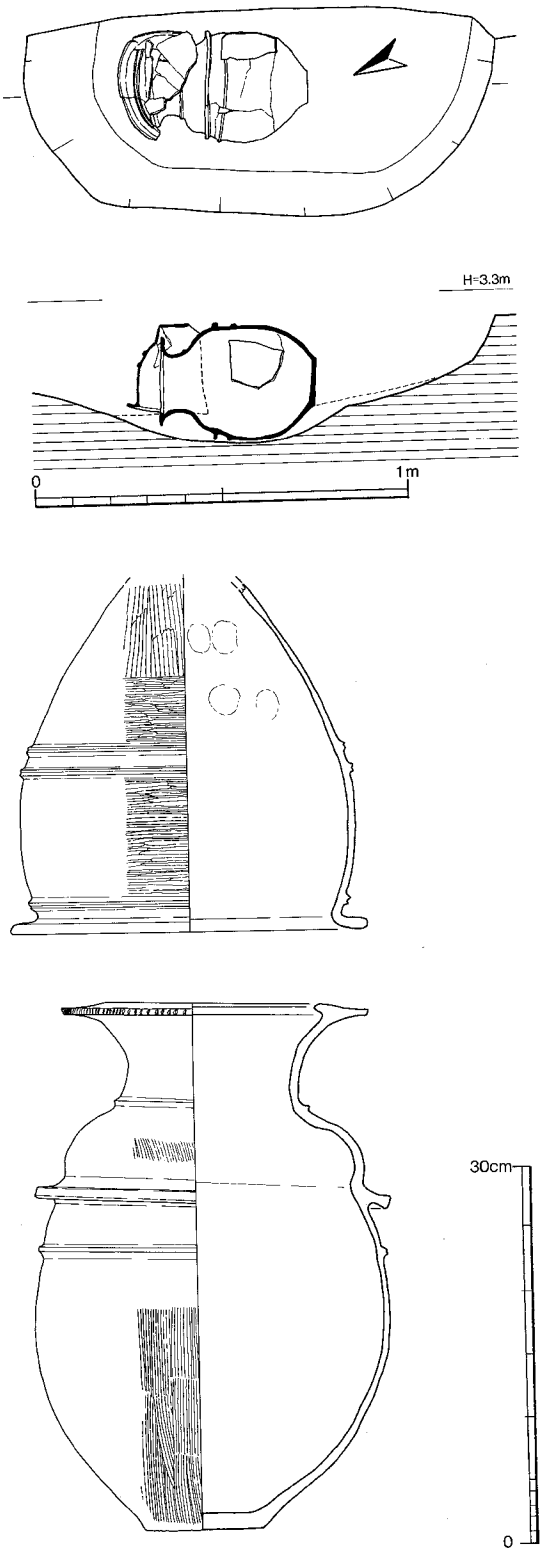


Fig.7 ST-005遺構・遺物実測図(1/20、1/6)

ST-007 (Fig.8)

調査区北東側で検出された成人棺墓で、削平が著しいが上下棺とも遺存する。墓壙は現状では楕円形で、南側を撹乱によって壊される。墓壙床面はほぼ平坦で、上下の甕棺は墓壙床面に密着して埋置される。甕棺はほぼ水平埋置で、上下棺の組み合わせは接口式である。覆土中には甕棺片の他には遺存するものはなかった。

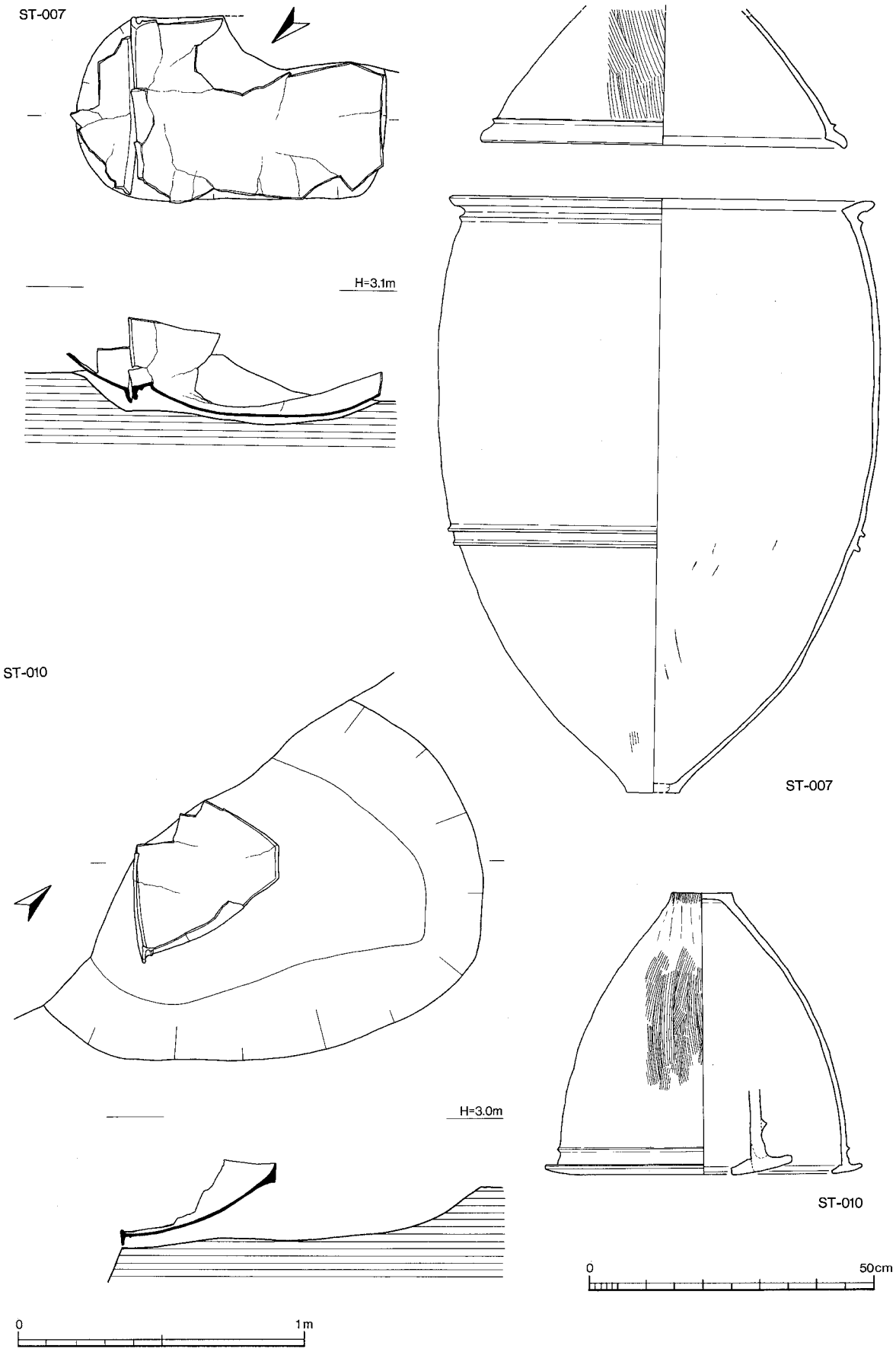


Fig.8　ST-007・010遺構・遺物実測図(1/20、1/10)

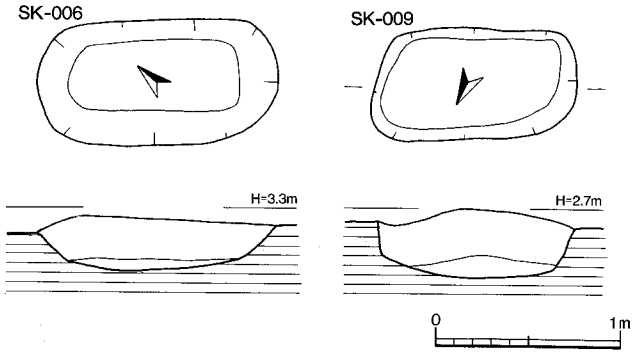


Fig.9　SK-006·009遺構実測図(1/40)

出土遺物（Fig.8）

上甕は鉢形土器と考えられる。口縁部の遺存状況が1/4程度で、底部を欠損するという、遺存状況としては十分ではない状態である。口径64.2cm、胎土は砂粒を若干含む粘土で、色調は明薄褐色を呈する。外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ調整。口縁部は上方に跳ね上がるようなく字形になり、口縁直下に突帯を一条張り付ける。

下甕も遺存状況は口縁部で1/3以下で、遺存状況は良くないが、口縁部から底部まで接合した形で復元できた。口径74.4cm、器高104.5cm、底径9.4cm、胴最大径77.6cm。胎土は砂粒をわずかに含む細かい粘土で、色調は明薄褐色を呈する。外面は縦ハケ目後ナデ調整。内面は上部がナデ、下部が縦方向へラケズリ後ナデ調整を行う。口縁部、突帯部分はヨコナデ。口縁部は逆L字に外側に突き出す。

ST-010（Fig.8）

調査区ほぼ中央で検出された成人棺墓で削平が著しく、西側部分を撹乱で完全に欠く。本来西側に下甕があったと見られるが、現在では下甕は完全に失われている。墓壙は楕円形であったと考えられ、上甕の上方にやや空間をもつ。上甕は水平埋置で、墓壙床面に密着して埋置されている。上甕口縁部付近には、下甕や蓋の痕跡は見られない。

出土遺物（Fig.8）

上甕は鉢形土器で、やや細め。遺存状況は口縁部で1/3程度。口径55.6cm、器高49.4cm、底径10.6cm。胎土は砂粒をわずかに含む胎土で、明褐色を呈する。外面は縦方向ハケ目およびナデ消し。内面は主に縦方向の板ナデ。口縁部付近はヨコナデを施す。口縁部は逆T字形で、口縁上面は外傾する。須玖式に属する。

3）土坑

SK-003

調査区中央で検出された土坑で、現況で20～30cmの深さのみ遺存する。平面形は楕円形で、長軸はほぼ東西方向を向く。全長1.7m、幅は現況で9.2mを測る。壁面は床面から緩く開いて立ち上がる。

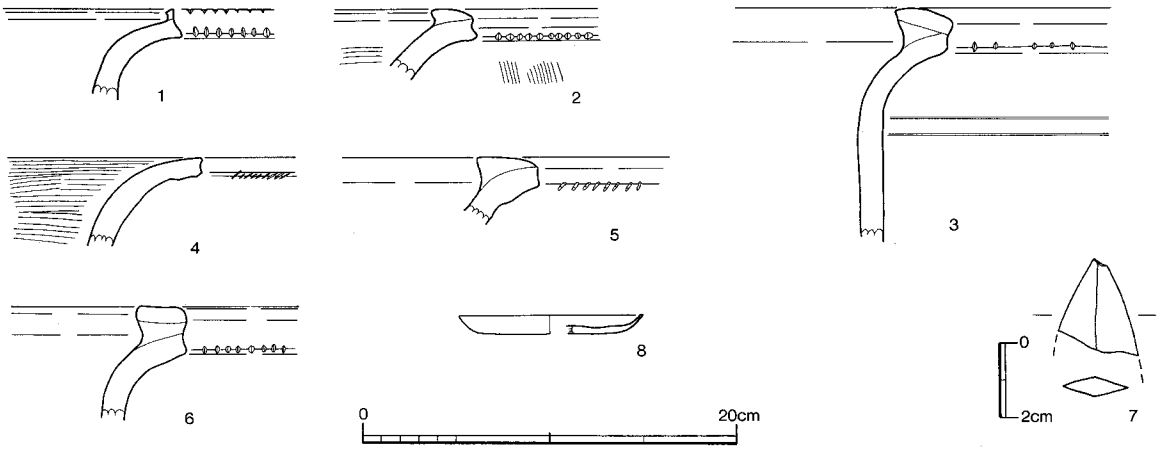


Fig.10　調査区内出土遺物実測図(1/4)

覆土は黒褐色砂質土で炭を含む。遺物は出土していない。

SK-006 (Fig.9)

調査区東側で検出された土坑で、平面形は楕円形を呈する。全長1.3m、幅68cm、現況での深さ25cmをはかる。遺構主軸は北西-南東方向を向く。床面はほぼ平坦で、壁面は床面から緩く開いて立ち上がる。土坑墓と考えられるが、遺物は出土していない。

SK-009 (Fig.9)

調査区西側で検出した土坑で、ST-007を切る。平面は長方形が崩れた形を呈し、現況で全長1.1m、幅60cm、深さ30cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁は直に立ち上がる。土坑墓と考えられるが、遺物はST-007の甕棺破片が出土しただけである。

4) その他の遺物 (Fig.10)

SD-001から破壊された甕棺片が多量に出土し、また撹乱からも多数の遺物が出土している。以下、これらの遺物を整理、報告したい。

1～3はSD-001から出土した、甕棺口縁部と思われる破片。1は外側に大きく開き、口縁上面に跳ね上げ状の粘土帯を貼り付ける。口唇部は横ナデて面を作り、上下2段に刻目を施文する。内外面とも、ヨコナデ調整。2は口縁部のみ遺存する。外側に開き、口縁上面に粘土帯を貼り付け、上面を外傾させる。口唇部下段に刻目を施文する。外面は口縁部ヨコナデ、口縁下部縦方向ハケ目。内面は口縁部ヨコナデ、口縁下部横方向ハケ目。3は直立する胴部から頸部で外側に開き、口縁上面に粘土帯を厚く貼り付ける。粘土帯上面は外径する。口唇部は横ナデて面を作り、下段に粗い刻目をつける。外面口縁部下に2条の沈線を回す。内外面ともヨコナデ調整を行う。

4～6は撹乱内から出土した甕棺口縁部破片。4は外側に大きく開き、口唇部下段に斜方向の細い刻目を施文する。外面はヨコナデ、内面は横方向ハケ目。5は口縁先端部のみの破片。口縁上面に粘土帯を貼り付け、上面を外傾させる。口唇部下段に斜方向の刻目を施文する。内外面ともヨコナデ調整。6は口縁部下で外側に屈曲し、口縁部上面に粘土帯を貼り付ける。口唇部下段に刻目を施文する。内、外面ともヨコナデ。

7は遺構面上層の撹乱層から検出された、磨製石剣の切先部分である。残存長2.5cm、厚さ5mmを測る。先端部はわずかに欠け、刃部は鋭利さを保つ。石材は片岩系である。

Tab.1　遺構一覧表

遺構番号	略号	種類	時　期	規　模	出土遺物	備　考
001	SD	溝	中　世	幅3.6m	土師皿、甕棺破片	調査区外に延びる
002	ST	甕棺墓	弥生時代前期		甕棺(口縁部欠損)	削平著しい
003	SK	土坑	不　明	1.7×0.92m		削平著しい
004	ST	甕棺墓	弥生時代前期		甕棺(口縁部欠損)	削平著しい
005	ST	甕棺墓	弥生時代中期		甕棺(小型棺)	北東側破損
006	SK	土坑	不　明	1.3×0.68m		
007	ST	甕棺墓	弥生時代中期		甕棺	削平著しい
008						欠　番
009	SK	土坑	弥生時代以降	1.1×0.60m	甕棺破片	ST-007を切る
010	ST	甕棺墓	弥生時代中期		甕棺(上甕のみ)	西側破損

Tab.2　甕棺一覧表

遺構番号	上下	形態	口径	器高	底径	胴最大径	備　考
ST-002	単棺	大型棺			11.4		胴上半部欠損
ST-004	単棺	大型棺			7.2	54.4	胴上半部欠損
ST-005	上甕	甕形土器	29.0			29.3	外面丹塗り・底部欠損
ST-005	下甕	壷形土器	25.8				外面丹塗り
ST-007	上甕	鉢形土器	64.2				底部欠損
ST-007	下甕	大型棺	74.4	104.5	9.4	77.6	
ST-010	上甕	鉢形土器	55.6	49.4	10.6		下甕欠損

Ⅳ.結語

今回の調査では、調査面積はすくなかったものの、甕棺5基を確認し、撹乱中から多数の弥生時代前期の甕棺片を検出するという成果を上げることができた。今回の調査における結びとして、今回の結果をフイードバックさせつつ、藤崎遺跡での甕棺墓群の状況をこれまでの調査結果も踏まえて述べてみたい。

今回の第30次調査では、伯玄式～金海式の甕棺2基、須玖式成人棺1基、立岩式（古段階）成人棺1基を検出している。須玖Ⅱ式小児棺1基をほぼ原位置で検出し、また撹乱中から伯玄式～金海式にあたると考えられる甕棺口縁部を6個体分検出している。したがって弥生時代前期に本調査区内では甕棺墓が最大8基存在していた可能性がある。

これまで藤崎遺跡で弥生時代前期の甕棺（金海式以前）が検出されたのは、第1次調査、第2次調査、第5次調査、第13次調査の各調査においてであり、第27次調査では遺構には伴わないが、板付Ⅰ式～金海式の多数の甕棺破片が出土している。それらの調査区の位置関係は、第5地点の突帯文時期と伯玄式の甕棺墓が出土した位置を除いて、本次調査区周辺と第5、27次両調査区付近の2ヶ所に位置する。第5地点で検出された夜臼式甕棺墓は、甕棺墓地が成立する以前の、甕棺が単独で埋葬されていた時期のものとしての解釈が必要と思われるが、藤崎遺跡が墓地として成立する先駆けとしての重要な意義をもつものと考えられる。このことから、藤崎遺跡の甕棺墓群が集合墓として成立した板付Ⅰ式～伯玄式にかけての時期は、甕棺墓群の西側に、分散した形で存在した墓群であったと見られる。

金海式の時期までは藤崎遺跡群での甕棺出土量は隣接する遺跡群と比較して多くはないが、しかし現在確認されている甕棺墓群の全域にわたって散漫に分布する状況が見られる。具体的には遺跡群１次調査、２次調査等の甕棺墓群西側～中央部分にかけての区域で金海式甕棺を検出している。そして今回２基の弥生前期～金海式甕棺を検出したことで、この時期に幅130mにわたる甕棺墓域が広がっていたことが伺える。このことは金海式の時期にはこの地点がすでに甕棺墓地として成立していたことを示すものである。また副葬小壷をもつ土壙墓、石棺墓が甕棺墓域と重複して検出されているが、これらは甕棺墓を補完するものとみることができ、甕棺墓と土壙墓を合わせた墓群としてはこの時期の早良平野北部ではまとまった墓群の一つであったと考えられる。

早良平野全体でのこの時期の様相を見ると、弥生前期～金海式に甕棺墓が集中している遺跡は藤崎遺跡の他、室見川中流西岸の吉武遺跡群、室見川中流東岸の飯倉Ｃ遺跡群、室見川上流の東入部遺跡群周辺などで、そのなかでも吉武遺跡群の規模が群を抜いており、室見川中・上流域の遺跡群で出土量が比較的多くなる傾向が見られる。その中で藤崎遺跡群の出土状況はどうしても低くみられがちである。これは室見川上・中流域での生産基盤の強化と、それに伴う集落の拡大、墓群の拡大に対して、下流域のラグーンで隔絶された砂丘上の遺跡との格差がこの時期に甕棺基数、副葬品を初めとする遺物などの形で最も顕著に現出したものとみてよい。

その後弥生時代中期に藤崎遺跡と隣接する西新町遺跡で甕棺墓群が拡大するのは弥生中期になって状況の変化が生じたためのものとみられ、海岸部の集落基盤が一定程度拡大した結果とみることができる。

以上のことを考慮にいれて、今回第30次の調査で弥生前期の甕棺墓が確認されたことは当時期の甕棺墓域がすでに一定の広がりをもつことを明らかにし、甕棺墓群の成立状況を明らかにする資料として重要な意味をもつものと思われる。

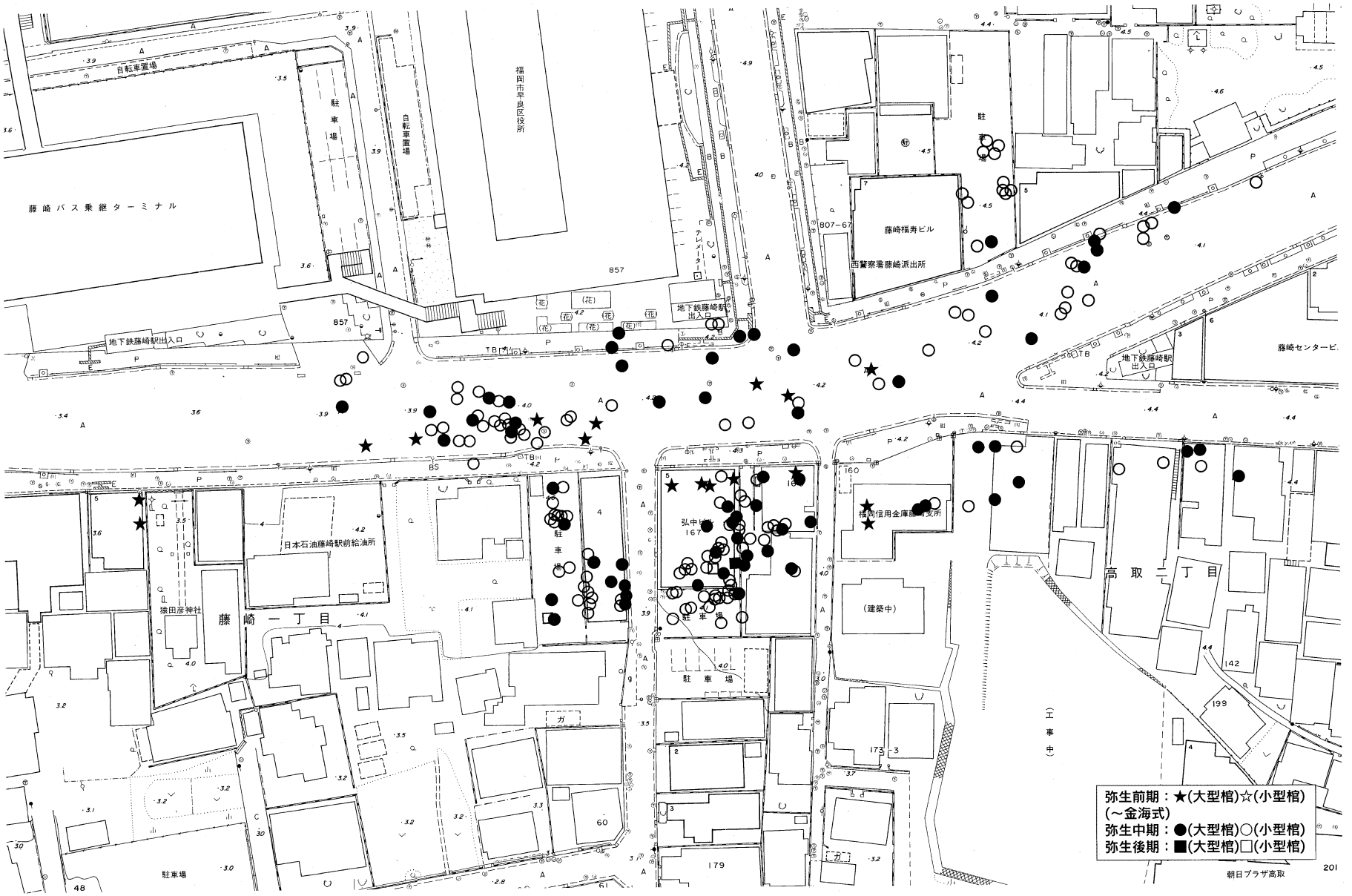


Fig.11　藤崎遺跡群出土甕棺墓分布図(1/1,000)

図　　版

図版1

(1) 調査区西側全景(南から)

(2) 調査区東側全景(東から)

(1) SD-001土器出土状況(南から)

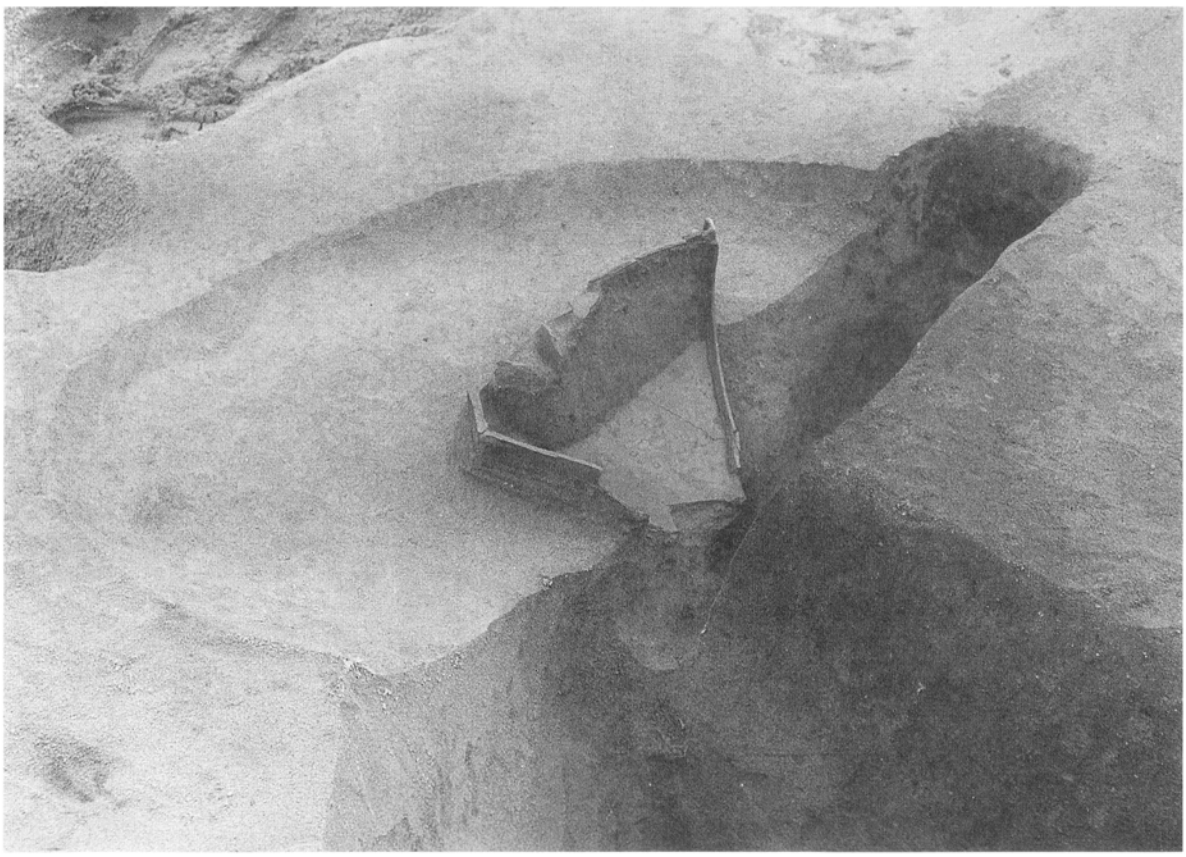
(2) ST-002(東から)

図版3

(1) ST-004 (東から)

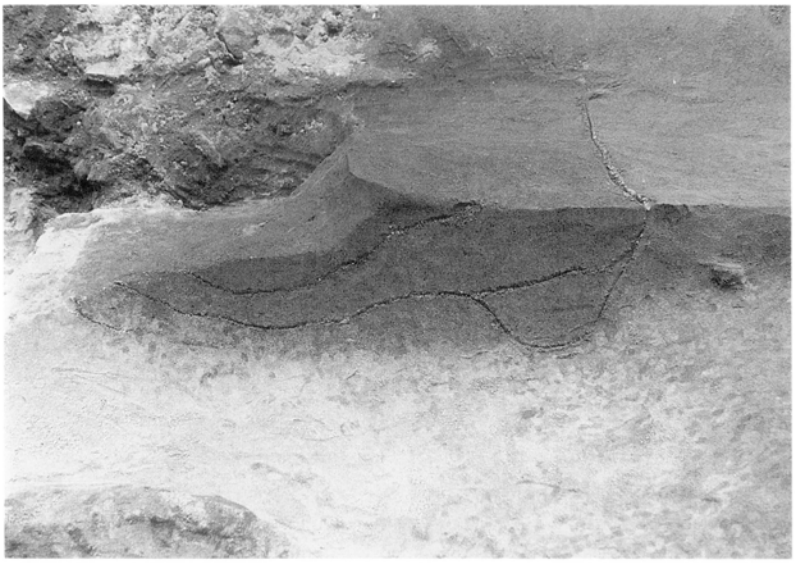
(2) ST-005 (東から)

(1) ST-007 (西から)



(2) ST-010 (北から)

図版5



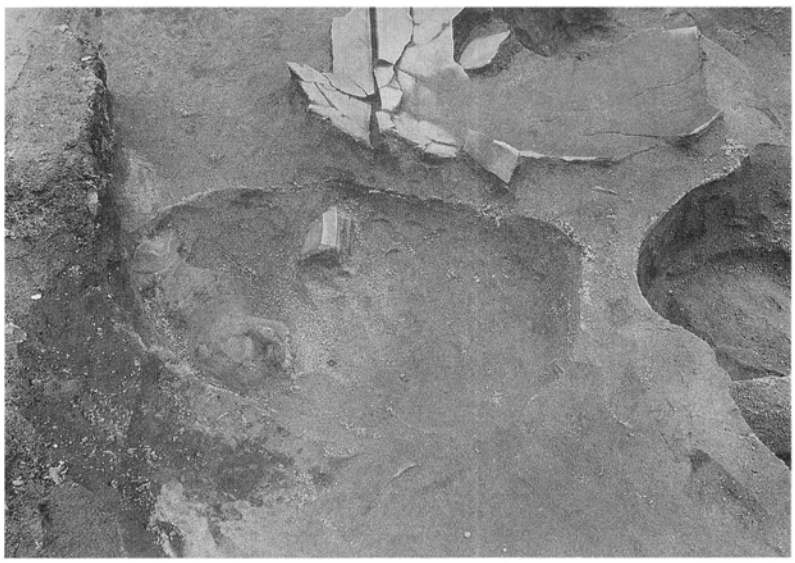
(1) SD-001土層断面(東から)

(2) ST-004周辺土器出土状況

(3) ST-005(西から)

図版6

(1) ST-005下甕出土状況(東から)

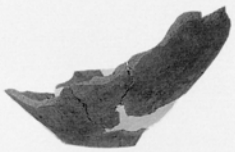


(2) SK-008(西から)

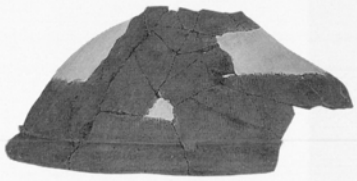
(3) SK-006(北から)

図版7

ST-004



ST-002



ST-005

ST-007

ST-010

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第606集

藤　崎　13

1999年(平成11年)3月31日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1

印刷　川辺印刷有限会社
福岡市南区高宮1丁目7－19

藤崎13

福岡市埋蔵文化調査報告書 第606集

1999

福岡市教育委員会